

山本天文台資料の語るもの

山本天文台の資料は、江戸時代初期に仙台から移り住んできた山本家代々、栗斎（祖父）、清之進（父）、一清の資料が集積されたものである。そのいずれの時代においても現代とちがい基本的にモノを捨てず、また整理整頓をこころがける生きかたをしていたことが共通している。1959年に先生が亡くなられたあと、長男の進氏の資料が加わり、1980年代以後はタイムカプセルのように建物自体が封印されていた。そして2010年に京大に寄贈されるまで、遺族や関係者によって整理・取捨選択が一切行われていないことにその特徴がある。こうした状況におかれたものは生（または初）な資料とよばれる。外光のあたらない状態で何十年保存された戦前の *illustration* などのグラフ誌や、海外渡航のおりに乗った客船のディナーメニューなど印刷されたばかりのように目も覚める鮮やかさである。その一方で、本来他人に見られたくないものや、後代からすると当人にとって不都合と考えられるようなものを含むこともある。その総体が山本天文台資料であり、先生をめぐる近代日本天文学史の真実を語るものである。

第3回報告会のあと、目録づくりを続けながら筆者の目をひいたいくつかの資料について、おりおりに関連する事項の調査をすすめつつ文章にまとめておいた。それらを事細かに報告する時間的余裕はないので報告では簡単に触れるにとどめたが、集録の印刷にあたり巻末に参考記事として掲載した。

ここではまだ文章にまとめてはいないが、先生がかかわられた天文台建設の話題をとりあげてみたい。こうした資料は、天文台名を書いてそれぞれ大型の茶封筒にまとめて保存されていた。

1. 藤井天文台 （1924、藤井善助）
2. 倉敷天文台 32cm 反射 （1926、原澄治、本田實）
3. 花山天文台 30cm 屈折 （1929）
4. 瀬戸黄道光観測所 （1939）
5. 花山天文台台湾出張所 25cm 反射 （1937）
6. 生駒山太陽観測所 （1938）
7. 山本天文台 46cm 反射 （1941）
8. 長島愛生園天文台 20cm 反射 （1949、本田實）
9. 金勝山天文台 250cm 反射（1954 計画のみ、堤康次郎）
10. 富山天文台（1954 年富山産業大博覧会関連、2-W6-22）
11. 日本平センター天文台 20 c m 屈折（富士観光）
12. アナナイ天文台 46cm 反射 （1957）

目に付いたものをあげるだけでも十指にあまる。ほかにも実に多数の天文台建設の話が手

紙などのあちらこちらに散見され、今後の要調査テーマである。当然、似たような概念設計が適用されることもままあるだろう。実際に、山本天文台の回転切妻屋根型ドームと三五教中央天文台の天守閣のような屋根の回転ドームとはよく似ているし、また倉敷天文台の傾斜スライド方式開閉屋根の原理は長島愛生園の天文台とも構造が酷似している。昭和 17 年に愛生園の光田延長から相談を受けたおりには移動小屋方式の概念設計をつたえ、それに基づいて園の施設係がひいた青焼図面が保管されている。レールなどの鉄材が入手できずペンディングになったまま終戦をむかえ、昭和 24 年によりやく完成したときには、倉敷天文台方式になった。これは本田實の助言が大きくとりいれられたのであろう。



山本天文台



長島愛生園天文台

三五教では晩年の先生が直接係られた中央天文台のほかに、各地方に天文台が建造され 20cm クラスの屈折望遠鏡が置かれたという。その全貌については月光天文台の五味氏が調べておられ次回に報告してくださる予定である。